

令和元年度第5回立川市第3次観光振興計画協議会 要旨

会議名称	立川市第3次観光振興計画協議会
開催日時	令和元年12月18日（水曜日） 午後7時00分～午後9時30分
開催場所	立川市役所210会議室
次第	1. 開会 2. 立川市第3次観光振興計画（骨子案）の構成内容について
配布資料	1. 立川市第3次観光振興計画（骨子案） 2. 立川市第3次観光振興の戦略と施策 3. 参考指標
出席者	[構成員] 会長 岩崎太郎、副会長 岩下光明、小野和久、中田龍哉、及川卓也、嶋津隆文、木嶋雅史、鈴木義嗣、矢ノ口美穂（産業文化スポーツ部長） [事務局] 奥野武司（産業観光課長）、津崎政人（観光振興係長）、中澤栞（観光振興係）、岸田知裕（観光振興係）
欠席者	都築諒、穂積計人、前田千歳
話題提供者	なし
公開及び非公開	公開
傍聴者数	0人
会議結果及び要旨	1. 次回第6回の日程は令和2年1月16日（木）午後7時から9時、今年度最終の第7回の日程は令和2年1月28日（火）とする。 2. 次回は観光振興の施策と戦略について協議する。施策及び戦略の内容を委員の事前課題とするため、事務局で施策及び戦略について整理したものを作成し事前送付する。
担当	産業文化スポーツ部産業観光課観光振興係 電話 042-529-8562

1. 開会

2. 立川市第3次観光振興計画（骨子案）の構成内容について

（会長）

本題に入る前に議事録で復習をしたい。

前は立飛から、SORANO HOTEL、GREENSPRINGS という新しい観光施設についての案内があり、その後、骨子案等資料について、みなさんの意見をもらって修正。中には章立ての変更のところまで。一番揉めたのはキャッチコピー。あったほうがいいのでは、という意見もあった。

次に推計値と目標値。数字目標を入れていくかどうかで議論があり、あった方がいいのではということになった。

その後戦略で、重複するところや、より具体例があったほうがいいとか、色々なところで羅列してもしようがないとか、色々意見をもらい、今日新しい骨子案をもらったところ。

今日の資料についての説明を。

（事務局）

資料に基づき説明。

（会長）

意見はあるか。おそらくあるのではないかなと思うが。

（D委員）

キャッチフレーズ、悪くない、これはいいなと思っているのを最初にお伝えしたい。

あまり多くは言わないが、どうしても1点言いたいのが、最初の部分でどうも話が食い違っている。市役所が「財源が減りますよ、だからサービスできなくなりますよ」という話だが、それは違う。

観光で求めていることは、街の中がどれだけ儲かるかどうか、元気になるかどうかという話。立川のGNPか何らか、4,000億か1兆円くらいいっていると思う。役所の税収なんてのは400億。400億の話で「あなたたちは不幸になるよ」と言うのは違って、「まちが少子高齢化で沈んじゃうよ」ということを言わなくちゃいけない。うちが貧しいからと言われてしまうと、それは街のことを考えてないよと。それを言いたかった。

ここをもし残したいのなら、「まち全体が沈むから、少子高齢化に対して準備しましょう、そのために観光やりましょう」と。「なお」とか「ちなみ」とか、「役所について言えばこんな形」というならそれはそれでいい。役所が全てとここでは読めちゃうので、それは横柄で、市民をバカにしているという趣旨で言った。

この扱いについて、どうしても取りたくないなら、「例えば」とか「ちなみに」とかで立川の税収はこうだという形であればと。どうしても言いたい。

（会長）

私の理解だと、人口が減ると税収が減る、これはよいか。

（D委員）

そこはよい。

（会長）

そうすると、観光とか商店街振興とか、そういう切迫したほうじゃない方の財源が減らされるという危機感、ということではないか。

（D委員）

たぶん5,000億くらいが立川の経済規模としてある。それは少子化の中で沈んでいく。その10分の1以下の400億の税収が立川市のもの。立川市のことだけで語るのは歪なのかなと。正しいけれども正しくないということ。

5,000億のこの「大」立川市を、400億の市の税収で語るのは如何なものかと、いうことを言った。特に、「財政が悪化すると、市民活動に影響するぞ」「財政が悪化すると、住民サービスが落ちるぞ」だから「観光しなきゃいけない」と言うが、税収が落ちようが何しようが、お店、ホテル、商店街の人はみんな頑張る訳で。そこを言わずして、観光政策の大事さは出てこないと思ったから。市役所の財政に小さくやってしまうと、市役所のためのものなのかと。市民のための冊子だと思うので、そこ

のところはかなり違っているのかなと。

(事務局)

この計画はあくまで行政である立川市がつくる計画ではある。

(D 委員)

立川市は誰に向かって出すのか。市民ではないかと。市民に働きかけるのに「うちが貧しくなるから、みなさん頑張ってください」と言えば、勝手にやれと言われるのではないかと。どうしても、自前のことを書きたければ「ちなみ」とか「しいて言えば、私ども市役所としてはこういう苦しさが出てくる」とか。それが全部であるような論理展開はまずいだろうと。

(事務局)

言わんとしていることは理解はしているつもりなので、何らかの形で。行政がつくる計画ではあるけれども、観光の分野ほど我々だけではどうにもならないものはないと思っているし、主役がまちの人なのは当然のこと。

立川の現状はある程度書きつつ、そことリンクさせる必要もあるかなと。書きぶりは考えたいと思う。

(D 委員)

次回までに検討を。苦いことを言ってすまないけれども。

(会長)

キャッチコピーで躓くかと思ったが。

(副会長)

市がつくっているものだから、市の状況を市民に説明するとか、市がなぜ観光をやるのかと。「福祉とか商業振興をやってよ」と言われたときに「今こういう状況だから市は観光振興をするんです」という立て付けの中では、このストーリーはあっていいのかなと。「こういう状況だからこういう政策を打ちます」というところの見方もあろうかなと。

どこが主体としてやるのかが後半に続いていくと、「行政はこういう動きをします」というものが当然含まれてくる。「こうだから、市民がこうやって」ではなく、「こういう状況があるからこそ、観光分野に取り組みます」というスタートであれば、あっていい流れなのかなという気もする。

(D 委員)

目標は、誰が儲けるか、誰がそこにお金が入るのを期待するか。それは市民であって、役所ではない。

(副会長)

役所がこの方針に基づいて、施策を打つ。

(D 委員)

役所が打つが、商店街の人、ホテルの人が頑張る。役所はいるだけではないか。

(副会長)

一般の方が見たときに「なぜ観光に力をいれるのか」としたとき、こういう状況だから税収を上げて市民サービスを継続していきたいと見えるかと。

(D 委員)

決定的に違う認識だと思っていて、役所のための役所の計画。市民がどれだけ潤うか、市民がどれだけ観光でいい思いをするか。税収が入って、分けてやるからいいよ、ではなく、市民そのものが儲けて元気になるのが一番。「市の方にまずはお金ちょうだい、そうしたらサービスやりますよ」という 400 億の枠ではなくて、5,000 億の立川の市民の方が潤うかが大事であって、そこで 1 億入ったものを商店街のネオンサインに使うとかは、そういう話は結果ではあるが、ここを通さずにやれるのが一番大事だと思っている。

(副会長)

この部分は、立川市の危機感の表れなのかなと。だからこそ、計画をつくる、進めていくという、行政がどういう方向に進んでいくかのベースになるかなと。

(D 委員)

だから妥協案で、ちなみとかで書いてくれればいい。全体のことを書いてもらってからと思う。

(C 委員)

他の地域での議論では、「どういう視点で観光振興をするか」という事例で論点整理になればと思うが、少子高齢化・人口減少問題で、東北の地方都市とかは切羽詰まっているところがある。

まず1つは、街の事業者が年1%くらい減っていることで、地域内消費が落ちていく。今まで売れていたものが売れなくなってきて、事業者としての危機感がある。これは民間。

行政としては、税収が低下することで市民サービスがなかなか今まで通りできなくなるという危機感がある。

そういった民官両方の危機感をもっているものを、一緒にやって観光によるまちづくりに取り組んでいくことが必要ではないか、という論理的な展開を他のところでは書いたり、議論したりしている。そういう方向性で整理するのはありかなと。

(D 委員)

それはよくわかる。そういう感じで言っている。

(B 委員)

同じような意見だが、第2節の第4行で、観光として期待していることが、「幅広い経済波及効果や雇用創出」とあるが、この裏返しが将来の見通しに考えられるということを入れると、今みなさんの言った民の部分が含まれるのかなと。こういう要素を上に入れていくと、バランスがとれるのかなと。

(会長)

起こっている現象をどう見るかの違いもある。この辺りはうまく調整を。

(事務局)

人口減少という言葉が、市役所の言葉で書かれていること。まちの人たちの稼ぎ、商いをする人の稼ぎが落ちる危機感のベースが薄い。だから我々の税収が減ってしまうよね、と。そこがバランス悪いと。

(D 委員)

その通り。民の部分を広げてくればということ。民が落ちる、それで市も落ちる、これは大変だというなら分かる。それが、民が抜けていて、市だけが大変だとなっているから引っかかるわけで、そのバランスだと思っている。

(会長)

ここ以外のところで、何かあるか。

私から1点。前回と違うところで、1ページ目の、計画の後にシティプロモーション基本指針とあるが、これは新しく入れたところか。ここにくっついている割には、それとのつながりがあまり書いていないかなと。ちょっと出てくるけれども、どう連携しているのかがもう少しあってもいいのかなと。これは感想だが。

それでは第4章の部分、こちらに変更点中心に説明を。

(事務局)

資料に基づき説明。

(D 委員)

相談だが、1月20日に毎年観光庁が年度の速報を出す。そうすると韓国の話は90%減る。その資料が3月に出るとすると、全然実態と違う。

やり方としては、おそらく1、2年で復活するから、無視して古いのをそのまま載せる方法と、誠実に1月20日に出たところに基づいて書くか。それは政治的判断かと思う。どちらの方が、傷が少なくて済むか。全然数字が変わってくる。

(事務局)

観光経済新聞だったと思うが、韓国が66%くらい前年比から落ちていて、ラグビーワールドカップで多少は増えているけれども、という記事があった。意見の通り、誠実にやるかどうか。特に国際的な政治の駆け引きの影響もあるので、そこを細かくやるよりは、トレンドとしては増えていく方向だろうと示すのもいいのかなと、事務局としては考えている。一過性のものととらえる可能性もある。

(事務局)

6月議会で最終的に報告をして決定になるので、1月に発表のデータを使わないのも無理があるか。場合によってはそれを書きつつも、令和元年度の特異性をトピック的にコメントを付して、ただ、これまでの傾向はこうだというのは示す形でやるか、という気はする。

(D委員)

一般的にはこう思われるが、こういった理由で参考として少し書くとか、それくらいにやっておくと、現実を無視しているようなことにエクスキューズできていると思う。それはいいと思う。

(会長)

それでは、続きの説明を。

(事務局)

資料に基づき説明。

(会長)

数字の確認だが、24ページで、まずイベント等については、30年度の240万人に増加率の16.1%をかけた数字ということでよいか。同じく、昭和記念公園も16.1%をかけて450万としたのか。

(事務局)

実際には、公営競技事業を除いた430万と(イベント等の)240万の実績値を足したものに(増加率16.1%)を掛けると、大体994万くらいになる。公営競技は(増加率を掛けないので)維持する。

昭和記念公園とイベント等が増えていくことになる中で、単純に(それぞれに増加率を掛けて)計算すると、昭和記念公園に500万人くらい来るような振り分けになるが、前回までの資料で将来観光客数を出した際にイベント等が200万から280万の80万増となる算定をしていたので、増加する数に関して配分は変えずに、昭和記念公園が20万増、イベントが80万増としました。合計すると1.61倍にはなっているが、単純にそれぞれ単純に1.61倍した数字にはなっていない。

(会長)

890万に1.61かけると1000万人超えると思うが。

(事務局)

890万から公営事業の220万を引いた数に1.61を掛けている。そうすると合計が990万くらいになる。それを純粋に(それぞれに増加率を掛けて)やると、国営昭和記念公園は500万人くらいになり、もっと増えないといけなくなる。それは現実的ではないので、そこは450万に抑えたまま、イベントを320万に増やしている。

(会長)

イベントにふっかけたことになるか。

(事務局)

修正前も80万人増としていた。ただ、これが妥当なのかを突き詰めるとトンネルに入ってしまうという現実もある。増加要因としてはステージガーデン、ホール、GREENSPRINGS内で行われるイベント、後はたましん美術館など、駅周辺では確実に増える要因はある。それが80万人までいくかというのは、今後の展開次第。大規模イベントに関しては、昭和記念公園が約450万人ということで、その部分がキーかと。

(会長)

その辺りはその他来街者に入るか。イベントに入るか。

(事務局)

今の集計だと、たましんRISURUホールのイベントも入っているので、ステージガーデンもおのずと観光客に入ってくるかと。

(会長)

東京都の実態調査の対象施設になる可能性もあるか。

(事務局)

RISURUホールは、対象施設ではない方に入っている。

(会長)

観光客数には入るといふことか、承知した。

(事務局)

資料に基づき説明

(会長)

数字のところはなかなか根拠に乏しいところがあるが、いかがか。

(D 委員)

膨らませ方ということは大事で、行政の1つの指針なのでやろうぜ、というのは大事だが、たまたまこの計画は不幸なことに、63億が前回やって届かなかった。数字が直って36億が20億になって痛みが減ったが、4割届かなかった。それがあって63億になっていると「何も反省していないのではないか」と、議会の立場だと確実にやられる話かなと思う。その時に、なんで前回のものができなかったのか、というその分析が何らかの形で必要かと。

それで頭を使って、数値を把握するのが難しいと書いたが、これだと一面もっともらしいけれども、行政には責任がないよと。数字の仕組みが違って、うまく作れないからできなかったということで、要するにこの3、4年間やってきた反省とかが全然どこにもない訳で。それってまずくて、どうしても63億にしたければ63億とした上で、この前それが未達成だった、要するに、この前計画出したときに失敗があったと。その失敗については、今後原因を分析しながらこの実現に向けて頑張っていくとか、そういう言葉でも入れないと、全く行政の責任が何もなくて、この前ダメだった、でまた同じ数字をだす、それだとマスコミも議会ももたないのではないかと。

だから、本当だとこの1年2年、何故至らなかったのかという分析がきちんと出てくるべきだとずっと待っていたが、なかなか難しいから出てこない。そもそも63億に無理があったかもしれないし。でも次に同じことをやるなら、同じ風呂敷を広げたと、格好をつけるためにはそれなりの理由があるわけで、それは数字の話もあるが、役所の責任が描かれてないのではないかと。過去の未達成の責任を取るより、未達成の失敗は分析して反映させていくとするのが、一番痛みが少ないかなと思っているのだが。

一番引っかかるのは、「あれだけ大きい失敗をして、半分も達成できなかった数字をぬけぬけと出してきたぞ」と言われたとき、どうエクスキューズするかをこの協議会の議論にしくちやいけないと。そこを相談したい。

(会長)

ごもっともな部分だと思う。自分は今まで推計値にプラスいくつで目標値を出すべきだと思ったが、逆に言えば推計値より低い目標値よりを出す必要もありうると。

(D 委員)

それは、役所の判断。

(会長)

観光客の積み上げのところは、結局は中心市街地に来訪したJRとモノレールと駐車場の人に掛ける12をしたものだから、全体的に中心市街地に来た人が足りなかったということになる。

(D 委員)

その通りかと。ただ、そういう形のものがあるが、なかなか数字では出せないし、辛いところだけ。

(会長)

なぜ中心市街地に人が来てくれなかったのかと。

(D 委員)

その通り。期待していた割には、というか半分しか来なかった訳だから、数字が甘かったか、呼びかけが薄かったか、どこかで何らかの責任をにじませないと、同じのは格好悪いかなど。担当者が変われば自分は知らない、というかもしれないが。

(会長)

この表から行くと、観光客数はマイナスちょっとだが、その他来訪者数が大きく及ばなかったということになる。目標に至らなかった理由を書く、ちゃんと分析すると。

(D 委員)

その通り。表向きに書けることは難しいが、少なくとも内部ではその辺りを検証して、これはまずかった、それが少しでもにじむような形で、同じ数字、63億で出すというのがにじむと、読んでい

る方も「苦勞しておるんだな」となるが、苦しみ方や分析が抜けた形だと、「そんな軽いものかよ」というものになってしまう。初めてならいいけど、2回目だから、やっぱり辛いよね。

(事務局)

そういう意味では、5年前に計画を立てた時点では、あくまで目標は中心市街地の来訪者数だった。ただ、5年間で立川に観光、またはその他目的で来る人は、中心市街地以外にも拠点ができて、立飛駅の周辺なんて、5年前は想像できなかった人の多さになっている。その部分を把握する数値を持っていないし、分散した可能性もある。

また、車で来る人も駅の方に車を停めないで、ファミリー層なんかは分散して立飛エリアで止めている可能性がある。そこが分析できてないことは15ページの下に書いてあるが、その数字を掴んで、5年間で立川市の観光や賑わいが変わってきている、ということをもっと分析して書けよというのであればよいが・・・なかなかそこは難しいところ。

(D委員)

そのようなことを書いているが、結局、やり方がまずかったということ認めたくない、書きたくないし、こういう難しさがあるというだけになっている。やはり率直に「前の時には基準もなかったし、数字の設定にもいささか希望的観測を交えて書いた」とか、そういった形で正直なところを書いてしまえばいいと思う。それが単に「状況を把握する方策がなかった」「これから必要になります」という話だけで逃げちゃうのは、たぶん観光課としても忸怩たるものが出てくるのではないか。これから一番のポイントとなるとところを反省、分析しなければいけないところをやらなかったことになっちゃうから。

頭を坊主に剃って悪かったとする必要なんて全然ないが、ここの部分で限界があった、こうやったために数字の乖離があったと書いてもいいのかなど。それが反省になり、次に繋がることになるから。63億をやりたいなら、そこに行くステップとして、議会にもマスコミにも通じるような言い方をされたらどうかなど。

(会長)

即答はできないと思うので、検討を。書くと決めたら書いて、書かないなら次回また協議を。

E委員はいかがか。

(E委員)

第6節の観光振興における課題、これがやらなくちゃいけない課題としてまとまっていると思うが、第5節の推計値、22ページの2行目に「モニタリングは本計画上の推進の課題となります」とあるが、なぜ課題のところに書いていないのかなと思ったところ。6-7と似ているとは思いますが、課題と言っちゃっているのに、書かないのはどうかなど。

(事務局)

6-7に加筆する形か。

(会長)

気になるのは、定量的にきちんと数字を追っていける体制をつくらないといけないということ。どこに書くかも問題だが、戦略にはあまり出てこないか。

(事務局)

入れたつもりではある。

(B委員)

議論がなされつつあるかもしれないが、ぱっと理解できなかったのは、現状の推計値があって、それに対する将来推計値というのが出てきて、その推計値を目標値にするというのがちょっとよくわからなかった。

推計値は把握がしにくいので、実態把握できていないかもしれないが、この推計値で行くと。それで推計値をどういう数値に持っていきのかが目標値だと思うが、先に将来予測の推計値が出てくると「今何もしなくても、その推計値通りになっていく」というような受け止め方を、読んでいてできてしまう。推計値が先に来て目標値が出てくるよりも、「今の推計値を土台にして目標を作ると、推計値上はこの数字になります」という方が、私としては捉えやすかったかなと。

(会長)

前回は推計値を目標値にしているが、その推計自体が間違っているのかなど。目標にしちゃっている。それをまた同じ計算方法で、また外れちゃっているのかということ。推計値の上を行かなきゃいけないのかなと思ったが、実績からいくと目標は低く抑えなくちゃいけなかったのかなど。同じにしていたが、本当はもっと抑えないといけなかったのかなど。推計が間違えちゃったのかなど。

(B 委員)

要するに、推計値と実態把握は別として、拠り所とする数値がなければいけないのでこの推計値を使うとしても、それをどう増やしていくかというのが、今のこの書きぶりで行くと東京都の 16.1%という数値をつかって目標値にすると。そのように増えることでこの推計になって、イコール目標になるということ。単純にこの 16.1%を使って出した数字を、目標値にする言い方で勘弁しちゃうやり方というのはないのか。ちょっと言い方がうまく伝えられないのだが。

(会長)

推計は「普通にやっていたら行くでしょう」みたいな感じか。

(B 委員)

そうすると、次の課題とどう関連付けるのかというのが出てくる。何もしなくても放っておけばその推計値になるのか、と読めなくもなかった。推計値自体が努力を含んでいて、次の課題を踏まえた上でその課題を解決していくと、16.1%増えて目標に達成するという。中身としてはそういうことか。

(事務局)

16.1%が正しいかどうかは別として、どうやらこれくらいになるらしいぞと。今までは推計値という言葉を使わずに、目標値の中でそういう計算をして、推計値を目標値としていたが、今回の計画ははっきり推計値だという言い方をして、それくらいになるだろうとしている。それでは、ただ何もしなくてもいいかという訳ではなく、そのプロセスには、伸びていくのは何かしら施策を打っているからこそ伸びていこう、ということを含めた推計値と考えてよいかと。

(C 委員)

東京都の推計値の設定が、それなりの施策をすることで達成できる推計値という言い方になっているか。

(事務局)

そういう解釈のもとに設定している。

(C 委員)

立川市としては、その東京都が出している推計値なりの目標に達するような、目標値を設定すると。

(事務局)

東京都が 16.1%というのも、東京都が「これくらい伸びるよ」と言っているわけではなく「過去 5 年はこれだけ伸びました」というもので、それがこの先 5 年も同じように伸びることを想定して推計値を出している。ひょっとしたら、そこに無理があるのかもしれないという気がしている。

「東京都全体でこれだけ伸びました」であって、本当に多摩の、この立川に伸びた人がごっそり同じだけ持って来られているのかということに課題があって、そこが目標に達しなかった部分なのかもしれないという分析は、ありうるかなという気がする。

(会長)

東京都の数字を持ってきたところに問題があったと。

(事務局)

東京都が都内の観光客と多摩の観光客の伸び率を出してくれていけば非常に使いやすいが、それが出していない。乱暴にというか、東京都の数字で、直近 5 年の、国もオリンピックに向けてすごい勢いでやっていた、お金もエネルギーもかけてやっていった成果を、この先オリンピック終わった後どうなるのだろうと不安な中で、同じようにもってくることは背伸びをしているのかなど。怖い気がする。

(D 委員)

本当にその通りで、新宿、秋葉原、浅草とパーンと伸びる数字を全部集めて 16.1%としている。そんなに来っこないだろう。それを持ってくる無理さ。あと、名古屋を持ってきているのは、ほんと当てにならなくて、どうして名古屋なのか。全然先進じゃない。だから変に膨らんじゃって、すごく大きな数字になって、結果的に嘘の目標を作ったみたいになる。

だから自分としては、本当は推計値は程々にして、緻密にやればやるほど後が辛くなるから。目標値はドンと出せばいい。100億で行くと決めるならそれはそれでいい。

その根拠として膨らませた推計値がこうだとやっちゃうと、絶対に足元から崩れていくというのがあって、だから推計値は細くしなければいけないほどいいというのが、自分の思いとしてはある。

(副会長)

この東京都の16.1%の数値は使わなきゃいけないのかという質問と、東京都を訪れている観光客の総数の1割も多摩に来ていないというところがある。その比率がわかれば、全体としては16.1%だけど、多摩で捉えるとそれが5%であるとか、そういった伸び率を謳う形は取れないか。それが実態に一番沿っている気も。

(事務局)

そこを含めて、期限が決まっていて急ピッチでやっている中で、突き詰める設定をしてしまうと、また苦労してしまう。そもそも観光客数とその他来訪者の分け方が正しいのかもあるし、分けたことによっては、名古屋から数字を持ってきたりするという状況を引きずっている。

D委員の言うように、なぜ達成できなかったのかが問題というよりは、何億という設定自体がそもそも間違っていたのかと私は思っていて、あまり書きすぎると、いろんな意味で過去を否定することになってしまうし、あまりそこに深くこだわってもしようがないというのもあって、向こう5年できちんと新たに立川スタイルをつくりあげたほうがいいだろう、という現在地に今いると思っている。

また、アウトプットの4,290万については、長期総合計画における後期基本計画の目標数値ということで、そちらが先行して出している。我々であまりいじってしまうと、そちらにまた影響が出るという事情も一方で抱えている。だから、アウトプットはいじりたくない、むしろいじれないという現状がある。

その数字は、その後の金額ということも含めて、そこをいじるべきか、いじるべきではないかという、あまりいじれない。それよりも、やることをしっかりと考えたほうが良いように考えていて、そのやることの中に「管理方法、マネジメント方法をちゃんと考えましょうよ」というのを盛り込んだ方がいいと考える。

(会長)

いじれないということか。書きぶりでクリアするしかない。

(D委員)

繰り返したが、ここまでくるとそういうことだと思う。がんじがらめだから。

しかし、それでもなお、将来に向かってちゃんとやるということ、2、3行書いたほうがいい。それは推計値の算定の仕方もあるかもしれないし、過去のこういうところに過大評価があったかもしれない、それも含めて今後の作業の中で整理していきたいとか、そういう形で書いてくれるといいのではと思う。16ページには気持ちはあるが、これでは何かわからない。はっきり書く。嫌だろうけど。ここくらいは書かないと目覚めが悪いのでは。

(事務局)

嫌だから書いていない訳ではない、本音では洗いざらい書きたいのが、こういう現状があつてどう取り組むのかは、後ろに書いている。今言ったように、分析のところ、な現状はこうなっているのか、なぜ進捗がこうなっているのかは、少し書き加えて次回見てもらえれば。

(D委員)

推計値があるが、どこで水が漏れるかわからないし、どこで批判が出てくるかわからない。それが来てもしよいような表現でエクスキューズの文章を作ったほうがいい。急に20億減ったりするけれど、かなり危ないと思っているので、本当はないほうがいいが、これは単なる参考で、これからきちんと作っていく形でエクスキューズした文章を書くというのがテクニック、少なくともそれが責任かと思う。

(会長)

その他の部分はいかがか。

では、いよいよ本題になるが、6章の説明を。

(事務局)

資料に基づき説明。

(会長)

基本指針は4つあるが「市外で市をおすすめしたい」というところは意図して外したのか。

(事務局)

市内在住に限定した。市外なので除いているが、1つのアイデアとしてはあるかと。

(事務局)

観光地や観光に力を入れているところは、しっかりお金をかけて数値をとっているのが実態だが、立川市はそれをしてきていない。それは現在ある数値を使って出してきた経過がある。今後、他の自治体の取り方を参考にしつつ、立川市のスタイルをきちんと確立するのが5年間の課題かと。シティプローションもその部署が予算要求をして、これをやるかやらないか決まってくるし、他の自治体の指標もそうだが、市が予算をとってやっていくのかという問題もある。

また今後出てくるが、MICE や、MICE に伴うDMOをつくるという流れの中で、立川市役所がデータをとるのか、もしくはDMOがとるのかという議題も、ここ5年間で出てくると思う。また、そのデータの拾い方に関しては、立川市地域全体で持つのか、ということも議論になると想像される。

(会長)

他にはよいか。それでは第2節以降の説明を。

(事務局)

資料に基づき説明。

(会長)

戦略1の部分、何か追加はあるか。2つ挙がっているが。

(F委員)

気になったのは、「立川をつくる」がブランディングに限定しているということなので、今までであるものよりは、もっと進んだもの、資源の開発ではないのかなと。「しらせる」とかに近いのかなと思った。そちらがいいかなと思った。

(事務局)

前回の第2次を見ての質問でもあったが、「みつける」と何が違うのか、そこを意識して変更した。「立川といえば昭和記念公園があるよね」「アートのイベントがよくあるイメージだよ」とか、頭の中に浮かんでいくもの、観光資源として育てているものがあるまち。より代表的なものを作るイメージで整理した。観光資源ではあるが、「立川と言えばこれ」と想像できるものをつくるという整理をした。

(会長)

F委員の言っていることは、1の「発掘する」の範疇に入っているか。そうすると、1が弱いとなるか。

(F委員)

ブランドをつくるのは、もっと「立川をひろげる」とか、そっちの方なのかなと。「しらせる」とか「ひろげる」とか。

(会長)

「つくる」の内容？

(F委員)

「つくる」がブランディングに特化するなら「しらせる」とか、そっちの方なのかなという意見。

(E委員)

開発のところの例はわかりやすくなったかなと。理解としては、点と線と面、みたいになってくるのかなと。点が「みつける」、点と点を線とするのが「つなぐ」で、「つくる」は面としてどう見せていくか。そういう整理かなと。

(事務局)

ブランディングは「しらせる」ではないのか、という意見はわかる。6つのフレームを生かして作ると、どうしても「それってこっちでもいいのでは？」というのが出てくる。「フレームは変えずに」

という整理の仕方をしたので、違和感が出てくるのは承知の上で提示した。許容範囲をどこまで設定するかにもよるが、「しらせる」ではないかというのはもっとも。

(F 委員)

そこは次のステップじゃないかなと。

(D 委員)

やり方とすれば、再掲とかでやる手法もあるかなと。一つに入れて苦しい思いをするよりは、こっちにも載っているという。それはテクニカルな問題かなと。

(会長)

連携していることだとは思う。再掲という形で、つくったものをこの取組で伝えるという見せ方は、案としてはあり得ると思う。それは意見ということで。

戦略2はいかがか。前回から出ている MaaS は、立川市で事業者がやられている？やる予定がある？

(事務局)

資料に添付したが、2月に JR、多摩モノレール、立川バスが実証実験として立川の MaaS アプリをつくる。どちらかという、交通の利便性向上に寄っている形になっている。遅延情報をリアルタイムで反映するアプリで、バスが遅れた部分を反映しながら乗り継ぎの時間を出すとか、人の移動をしやすくするのが1つ。また、アプリの中に電子チケットを入れて、モノレールと多摩動物公園とが連携して、電子パスで入れるような取組で、その移動経路を合わせてアプリで出すのを、社会実験でやる。箱根、瀬戸内ではアプリ1つで経路の中に「観光地がこの金額で決済、予約、移動しながら遊べる」という環境をつくることを試みている。それを MaaS と表現している。

その流れが立川にもあるので、交通対策という趣旨が強い形ではあるが、観光施策に活用できる可能性はある。立川市が強くやっていくと強く言える状況ではないが、社会のトレンドが来たときに歩調を合せられるような意味を込めて盛り込んだ。

(会長)

わかりました。

(E 委員)

「つなぐ」の戦略2のある30ページの。場所をつなぐのが戦略としてはメインになるのか。繋ぐのに大事なのは人だと思うが。人に対しての何かがないと。アプローチが必要かと。

(事務局)

どんな施策が考えられるか。

(E 委員)

コーディネーターの存在がキーになってくるのではと。

(F 委員)

戦略5に被ってくる部分もあるか。

(E 委員)

どこかにあればいいのかなと。

(会長)

D委員のやり方でもいいのかなと。留意事項とする。

(D 委員)

国立は案内人が15名くらいいる。年齢は少し上だが。立川はあるか？そういう人を一杯増やすとか。

(事務局)

それは、後の戦略に入っている。

(会長)

新たな広域連携スタンプラリーの実施について、立川体験スタンプラリーがあるが、地域イベントを連携させたりするのに、必ずしもスタンプラリーでなくてもいいのかなと。限定しているのが気になっていた。

(事務局)

確かに。例としてあればいいのかなと。細かいところも意見をもらえれば。

(D 委員)

広域連携イベントの実施と書いちゃえばいいのでは。細かいのは、次の細かいところで書けば。

(事務局)

アート系、芸術系のイベントは多いが、面で繋がっていないと感じていて、立川体験スタンプラリーで官公庁のイベントを循環させているので、それをやれば、と浮かんだもの。

(副会長)

「つなぐ」は市内の地域に限定された書きぶりなのか、多摩のゲートシティなりハブシティの役割も包含しているか。

(事務局)

その役割については、38 ページ以降の「ひろげる」にその視点があると考えている。書きぶりなどが不足していれば、意見をもらいたい。

(会長)

よろしいか。それでは戦略3の説明を。

(事務局)

資料に基づき説明。

(会長)

「立川と言えばこれ」とぱっと思い浮かぶもの。

(事務局)

そうなれるものを磨き上げる。もともとそういう記載もあったが、わかりやすいように編集した。もしかしたら、点、線となって、例えばアニメなどのジャンルもそうなりうるし、中野などはそういった形で取組をやっているが、そういったものを意識して整理した。

(会長)

アンケートをみると、一番は昭和記念公園、次に食事ショッピングとかがブランドイメージであるとあるが、それはそれでいいと。

(事務局)

昭和記念公園はもういい、ということではないが言わなくても育っている。そこではなく、ファール立川が「アートの街だよ」 というイメージに昇華させるのが、次の目標なのかなど。

(C 委員)

ブランドって扱いが難しく、まず5ページのキーメッセージ「あなたの好きがみつかるまち」とある。これは仮だが、立川の多様性を表していると思っていて、様々な個別コンテンツの受け入れ、軸を持っているのがブランドだ、というものを打ち出している。そこに立川ブランドの創出、新たな観光ブランドを創出するとすれば、今の既存のブランドにプラス新しいものをということであればいいのかなど。この中のアートだけが目立つとか、立飛だけが目立つという、個別で取り出しているように思われぬような書き方が必要かなど。例えば、「We Are Park」みたいな「人間が公園です」みたいな、全てを包括するメッセージ、そういったものがブランドのキーメッセージであって、個別のメッセージとは違うものなので、その整理をしながら盛り込んでいかないと、関係性はどうかだろうとなる危険性がある。

(D 委員)

先ほどの話とも関連するが、スタンプラリーは唐突感がある。大があって中があって、突然小ができて、個別の事業がぽんと入ると、そのイメージで固まってしまう。ブランドを大きく統括するコンセプトがあって、その下に個別のものがある。全体をブラッシュアップする必要がある。個別のところから抽象的なものもあって、それを全部腑分けしたほうが絶対いいと思う。それが言われていることの一つかなど。

(C 委員)

スタンプラリーは具体例として挙げればと思う。

(事務局)

今回は本当に網羅的に、どこがやることなのか、とにかく構わず、賑わいに繋がるようなものを挙げられるだけ挙げてみたという形。どれに注力するか、ポイントを絞ったほうがいいのかという意

見もあって、今回は網羅的なことはやめた。

ただ何も書かないのもイメージが沸かないという意見もあり、例を挙げた。例を1つ1つ示せば統一感がでるが、示せないものもあって、レベル感は意見と通りかと思う。そこはどのようなところに落としていくか。

(会長)

また全体を通して見てもらって、検討してもらえれば。確かに唐突なところもあるかと思う。

(副会長)

新たな広域回遊性事業とか。そこで例にスタンプラリーがあるとか。

(事務局)

31 ページか。

(会長)

そういう形で31 ページも書いた方がいい、という指摘。

(事務局)

31 ページが具体的すぎるか。

(C 委員)

新たな重要戦略という位置づけならいいが、なんでこれだけ書いてあるのか。

(事務局)

なぜ書いてあるかというのと、1 番の文化・芸術のまちづくりの部分は、前回の計画のさらに上位階層のところに書いてあって、もともと思いが強かったのだろうという認識と、力を入れて取り組んでいて、資源としていこうと続けているもの。加えて GREEN SPRINGS もできて、芸術の機運が強くなるだろうということが残した。

2 番については、立飛の取組の存在感がますます増していくだろうと。その中で、歩調を合わせてエリアの価値を上げていくという取組は必要だろうと。そのきっかけを残した方がよいだろうと。どこに入れるかを考えてここに入れた。

(C 委員)

ここを活かすなら、3-1 に「新たな」とかそういったものを入れながらというのもありかと。

(会長)

内容が悪いわけではないので。

都市ブランドの編集の部分はいかがか。シティプロモーションの内容が分かっていないと何とも言えないが。

(事務局)

所管では、ブランドメッセージをつくる方針を決めて出しているが、全くベクトルの違うことをやってもずれちゃうよねと。全く被るわけではないが、そこを活かしながらいきましょうと。これも視点づくりで盛り込んでいる。

(D 委員)

全体の計画について、時間軸がどうしても薄いと思っている。歴史というのは記憶遺産で、そこを大事にする。特に年配層は地域の歴史を特に大事にするので、立川のブランドに入れられないかなと。

立川の鉄道とか基地とか、そういった歴史遺産をもう一つのブランドとする。立川の近現代の証として。あと、立川は飛行場があったから発展した訳で、鉄道の結節点というものもあるが、そういった近代のイメージ、どう記載していいかわからないが、立川飛行場とか甲武鉄道とかは東京の軸だと思っていて、そういったブランドづくり。その取組としては、以前配布した資料で、広域的な連携をして観光案内やマップを作ろうとか、それをやるかやらないかは別として、そういった歴史を入れたブランドづくりをやったほうがいいのか、ということをご提案したい。

(会長)

提案なので、採用されるかは別として、検討を。

(E 委員)

先ほどC委員の「あなたが好きと出会えるまち」との整合性と、「立川をつくる」というところの確認で、今立川にないもので、みんなの好きなものを持ってこよう。博物館とか、水族館とかを作る

うとか、そういうことではないということでしょうか。

(会長)

それでよいかと。まちのみなさんがそういうものを否定しないまちだとは認識していて、新しいものを作るときに、例えばアニメとかそういったことも、だからこそ多様性のあると認識している。

(E 委員)

「ここにはないものは多摩にはない」そういうメッセージにしようとしている訳ではない？

(会長)

基本は元からある地域資源を生かしていくと基本にあって、とてつもないものを持ってくるといふ視点は元からないと思う。誰かやりたい人が来るのは構わないが。

次の説明を。

(事務局)

資料に基づき説明。

(会長)

ここはいかがか。後で振り返ってもよいが。

戦略5の説明を。

(事務局)

資料に基づき説明。

(会長)

それぞれの関係性でも構わない。内容でも。いかがか。

(A 委員)

37 ページの観光協会の件は、反対ではないが観光協会に限るのはおかしいのかなと。これは市内の観光振興の財源の確保という表題なのかなと。それに対して観光協会と連携して、例えばフィルムコミッションも含めて財源に変えていくのかな、という発信なのかなと。具体的に観光協会の財源を確保するというのは、ちょっと違うのかなと。

また、MICE も入っているが、ビジネスイベントということで観光振興との差別化、融合の部分がないが、提案というか、ブランドを創出する新しい観光資源の発掘として、1つの切り口とすれば、MICE のビジネスイベントの取組も観光資源の新たな創出に入ってくるのかなと。

(会長)

私としては、観光協会と書いてもらったのはうれしいかなと。

(事務局)

観光協会がどうか、ということではなくて、書いた方が「よし」という気持ちになるかなと書いた。前回の計画が非常に曖昧な書き方で、どこに着地点があるかわからなかった。実際何もできなかったというのもあって模索しているが、どうするか。

(会長)

確保の方法がフィルムコミッション事業に限定しているのを直せばいいのでは。「など、様々な方法により」とか。

(A 委員)

観光資源の財源化の恩恵を受けるのは観光協会のみならず、民間、別団体に行く可能性も十分ある。観光協会を含めての話ならいいのでは。

(事務局)

観光協会などにするか。

(会長)

観光協会ほか、とか。

(A 委員)

限定しているのがいかがなものかと。

(D 委員)

観光協会は1つの柱だから、観光協会を充実するというのが1つあって、それ以外があるとすれば、2番目の柱で他の事例を入れて、そこも充実を図るとかそれくらいにして、ワンオブゼムに観光協会

をしない方がいいのかなと。

また、ここまで書くなら、フィルムコミッションの金をやるだけでなく、市も助成するとかで、そういう話があって、初めて立川観光協会の自主財源の確保が生きてくるのかなと思うので、やってもらった方がいいかなと。

(事務局)

限らないという視点は、全て「主な」とあるので、これだけではないという意味で、観光協会には限らない。フィルムコミッションも「など」と入れている。

ただ、具体的に仕事をしている中で、メスを入れられる可能性があるところなので、具体的に書いた。もちろん行政の部分も、これまでの長い戦いが増えていない現実もあると思うが。

MICE の関係で、DMO の部分での行政補助の話も出ているところで、観光協会に限らず行政からのお金のねん出は、今後永遠にテーマかなと。行政も出さない訳じゃないが、福祉のお金が増えている中で、「@観光にお金を入れてください」と言って、競輪が好調だった時代と違い、財源がないというのが現状で、街の中でどう稼ぐかを、観光協会だけでなくあらゆる事業者が考えなければいけないフェイズにあるかなというのを、リード文で入れた。そこに観光協会を入れた。

(会長)

これは観光振興計画なので、商店街なら商店街、農業なら農業の計画もあるのでよいのでは。

(事務局)

実際の現場の意見もあると思うので、現場の方から「少しそれは」というのがあれば、調整する。

(会長)

後は、MICE の件。

(事務局)

MICE は「つくる」でもいいのかなということか。

(A 委員)

その論議をすると、ビジネスイベントと観光資源がどうなのかと突っ込んでいくと複雑怪奇になるので、ここで収めてもいいが、ビジネスイベントが1つの新しい観光資源の創出の中の、ブランドの新しいものであるなら、こちらの方がインパクトもあるのかなと。

(事務局)

C 委員の意見の通り、新たなブランドの創出となった場合、ビジネスの拠点としての立川というようなブランドづくり、という書きぶりでもいいかと。

(A 委員)

東京都からも重点エリアになっているので。

(会長)

ビジネスイベントは色々なものが来る。何でも来るが、それがブランドになるのか。

(A 委員)

ビジネスイベントをやっていること自体がブランドになる。

(会長)

ビジネスイベントのまち？

(A 委員)

そのための取組なので。

(会長)

例えば、アニメジャパンを持って来たとなればブランドになるかもしれないが、色々なものが来る。

(A 委員)

それが来るということがブランド。

(会長)

イベントがいっぱい来るまち？

(E 委員)

幕張メッセとかか。

(F 委員)

知名度向上は、立川市としての知名度かと。立川という名前を具体的にもっと知ってもらおうということでは。そうすると、MICE とかは新しいというか、これから作っていくということになっていくのではと思う。取組内容も、立川を知ってもらうために他にできることはないかなど。

極端な話、国内・海外の観光博に出店するとか、PR のものを書いた方がいいのでは。立川そのものを広める、知らせるのであれば。

(事務局)

MICE は「つくる」に入れるか? 「MICE のまち立川」という、横浜とか、福岡、大阪、主要都市で実際やっているが、大阪だとスポーツをひとつキーにして MICE に取り組んで、スポーツイベントに取り組んでいる。

「ビジネスの研究を一杯やっているまち、立川」みたいに見せるのか、色々なつくり方があって、ちょっと固まっていない。なので、具体的に「つくる」に入れ辛いなと感じたところで、どこかに入れないとなとも思っていて、立川のアピールになるという説明をしているところではあるが。

(C 委員)

内容で限定するのではなくて、例えば立川 MICE の競合優位性って何か。立川の滞在の仕方と、ビジネス・MICE の受け入れ態勢の整備がされているということのブランドイメージを作って組み合わせると、立川らしいものになるかなど。

(副会長)

MICE には2つの進み方があると思っていて、1つは誘致で、受け入れ施設が必要、PR はこっちでやるという基盤整備。もう一つは、会議体、イベントを生み出して開催するというもの。積み上げ方が違ってくるのかなど。スポーツイベントを生み出すならそれでいいが、誘致するなら場所が必要。「おもてなしの環境整備がこうあります」とかの整備が必要、施策になってくる。どう捉えるかで話しこむ場所も2つになるのか。

(会長)

MICE はイベント実施も含まれている?

(A 委員)

基本は誘致。

(岩崎)

そうすると、「イベントを一杯しているまち、立川」ということか。

(A 委員)

今のところ東京都の指定受けて、八王子と立川が重点エリアになっている。都内はいくつかあるが。

(会長)

MICE をすごい誘致するまち。施設の名前なら別だが、相当なノルマかと。

(A 委員)

MICE 自体の自力もあるが、それをやることでの整備などもあって、2つになってしまう。

(事務局)

立川ブランドの創出で、MICE とか歴史とか、どういったブランドがいいとか、人それぞれだったり、時代によって変化するもの。私なんかは個人的な趣味で「サウナの街・立川になったらいいな」とか思っているが、個別のところまで全て取組として入れ込むのはおそらく難しいのかなど。

時代で変わったり、好き嫌いで変わったり。あくまで色々ある中で、時流だったり、好きなこと、好きなものを集めてブランドを創出する取組をやろうと。

「例えば歴史とかアート」みたいな、そうしたほうがいいのかなど。このブランドは入れる、これは入れないとかだと、ここが膨らみすぎちゃうかなど。

(D 委員)

一杯並べるのは山ほどになって大変になるというのものもあるが、アクセントは必要で、MICE は重要だと思っている。ただ、立川で MICE をやるだけの力はまだ少ない。京都、福岡、札幌。立川は 100 番目、200 番目になる状況。しかしホテルもできるし、働きかけとして MICE のまちでありたいというのはやってもいいと思うが、ブランドにやるには実績もまだないのでまだ難しいかなど。取り組むことはきちっと入れたほうがいいと思う。歴史もやっぱり人が来ると思っているの、そういったア

クセントはあったほうがいいと思う。

姉妹都市との交流も、場合によっては「ひろげる」という、交わるという意味で入れたほうがいいかと。ごそつと抜けてもったいないなど。せっかくアメリカと信州があるのに。そういったことも提案したい。

(E 委員)

立川市の観光振興計画に入れるべきかわからないが、立川って若い人が入ってくるが、数年で出ていってしまう人も多いところ。外に出ていった人をうまいこと、立川を知ってもらうきっかけとして使う、と言うというのであれば、そういったことはできないかなと思ったところ。

例えば、西日本に行っちゃった人に、立川市で何かするとき、観光に関することであれば手伝ってもらおうようなことを、繋がりを持っておくようなことを戦略に組み込めないのかなと。

(会長)

人材を育成することか。

(E 委員)

それもそうだが、出て行ってしまいうことも解決しなきゃいけないが、出て行ってしまいう人も立川にプラスアルファになることを持って行ってもらいたいと。それを入れ込めないかなと。できないか。

(C 委員)

関係人口的なところか。

(E 委員)

その通り。その視点が無いのはもったいないかなと。

(C 委員)

通常だと移住、定住のところで人口流出防止の戦略に出てくるテーマではあるが、観光によって人材流出防止をする、地域産業の振興によって人材流出防止の役割を果たすことを目指すみたいなのところか。

(会長)

総合計画にはあるか。流出、人口減食い止めるとか。

(事務局)

まち・ひと・しごと総合戦略の中におそらくそういったことはあるかと。ただ、そこまで移住定住の施策に力をいれていないかと。

(会長)

30代くらいが抜けていっているのだったか、立川市は。

(事務局)

そういった意味で、プレミアム婚姻届など、そういった施策は他の福祉施策で打っている。そういった課題はあらゆる施策で打っていくということではあるが、観光の中で転出した人へのアプローチで何をやるのかということ、関係人口と言われつつも私の知識では出てこない。具体的にあれば。

(会長)

関係人口を増やすというのは、観光施策ではあると思うが。

(E 委員)

戦略としては、「しらせる」が6本の柱のひとつにあって、立川を知らない人に知ってもらうためにできることは何だろう、というところを考えるのに、そういう人たちがいるなら活用できないのかなと考えたところ。

(会長)

立川を出ていった人を活用すると。

(E 委員)

立川をぜひ紹介してねと。「一回行って見るといいよ」とか言ってもらおうような。

(副会長)

大町はサポーター制度があって、ボランティアで組織されている。出ていった人もメーリングリストをつくって、常に立川の情報が届くとか。これまでの観光地ではないから、出た人に何をどう紹介してもらおうかが難しいと思うが。

(D 委員)

個人情報とかあって、なぜこんなものが届くのかとうるさい時代。立川市だけだと難しく、立川高校の生徒とか、ワンクッションがあれば始めてネットワークがやりやすくて、立川にいたからとしがみつくのは矛盾が出てくるかなと。

(C 委員)

理念的なものであれば、「立川をつなぐ」に人はどうなんだとあったので、回遊性と観光資源イベントを連携するということと、観光の世界だけでなく、公共空間、公共機関と観光をつなぐとか、市民と観光をつなぐとか、市外に出ていった元市民と観光をつなぐとか。政策間連携的な、そういった新しい発想の繋ぎ方を展開する中で、より観光振興が新たなタイプのモノになって広がっていくというような、そういった視点を盛り込むなら、2-3に入れていくこともあるのかなと。個人的な意見だが。

(B 委員)

計画自体のわかりやすさという点で、第6節の課題と、第6章の基本方針と戦略の関係性がより整理できれば、よりわかりやすいなと。それぞれの施策がどの課題を解決するために当てているのかというのが見えると、よりわかりやすくなるかなと。

おそらく1対1の関係ではないと思うので難しいが、課題を挙げたのなら、これに取り組むべき計画だと思っていて、それに対してその施策を打つという結びつきが見えるとわかりやすい。

また、課題に結びついてない施策があるとすると、逆に課題として盛り込まないと、課題解決のための施策なのに課題がないと、施策としては何のためにあるのか、確認したほうがいいかと。整理としてはちょっと難しいかもしれないが。

(事務局)

今までは課題がなかった。現状、戦略みたいな唐突感があったので入れてみた。突き詰めると「ここだけではない」となる可能性があるので、現状入れなかった。次回やってみて「いいな」と思ったら入れていく。逆に「ん」となるようなら、そちらでやってみる。

あと時間軸で、JRは置いといて、立飛に関しては「飛行機・基地のまち」というのを思い出したくない市民も一方でいて、計画でバンと打つのはよくないというのは、一方で認識しているところがある。ただ、立飛の歴史資源も、ということを見ると、市が主導というよりは、立飛が主導で市がそこに協力するような物語を考えると、32ページに含ませているつもりで入れている。

GREENS PRINGSでは、実際テイクオフカフェということで飛行機を展示したコンセプトがある拠点、クリエイターを支援したり、130周年の動きも立飛は立飛であるので、そこを連携していくトーンの形でいければと思う。

(D 委員)

調整はどこのまちも大変で、砂川の話もあるが、公園には天皇の会館があって、珍しくて、そこも観光資源。何より近現代史をきちんと伝えていく。観光資源としては絶対あると思っていて、厚木でマッカーサーをどう扱うかとあって、思い出したくないという人もあるし、それで人来るならちゃんやろうよと、ジープとか喫茶店にアメリカ軍のものもってきて観光喫茶にするとか。

もう戦後70年も過ぎて、立川の飛行場の話はこのあたりの産業の起点になった話なので、ちゃんと伝えていってもいいかなと。ファンもいる。

(事務局)

立飛が色々主体的に動きがあって、それを応援するというスタンスでいいのかなと。E委員の意見は、具体的なものがあれば、抽象化した概念で取り入れることもできるかなと。

(事務局)

立川には自治大学校があって、全国の自治体職員が年間1,000人単位で、長い人は5か月位、それが前期・後期2回あって、それ以外にも係長クラスで3か月とか、課長はもっと短い、全国の行政を担う人材が日本全国から集まる研修所が立川にある。

そのみなさんが過ごしている期間は非常に濃密な生活を過ごされて、地元に戻った時にOBが年1回、幹事になって交流をしているようだ。立川にも来て、お金を落としたり宿泊したりしている。滞在期間中に立川の魅力に今以上に触れてもらい、その人たちが地方に行くときに、「立川はいいまち

だよと、遊びにも行けたし」というのを含めて、広域の種になるのかなと。

去年人材育成の部署にいた時に、そういう視点で、学生に立川のことをもっと伝えようという取組が、若手職員の政策提案の中であって、実際に最初のガイダンスの中に時間をもらって、立川の観光の紹介をする、みたいなものをやりはじめたところ。

そういったところも、日本全国に立川のファンを増やす、そこからつなぐということでいうと、少なくとも何らかの強い思いがある人が集まってというのは、立川高校の話もあったが、何らかのどこかにあってもいいのかなと思う。

(D 委員)

それはすごくいい。国立だと、一橋も青春。自分が出世する一番の出発点として、めちゃめちゃ思い出が強い。キラキラしていて、使わない手はない。宝物だ。

(事務局)

実際には出向者がプレゼンを引き続きやっていて、アピールはしている。それ以上のことをどうやるか具体的に書けないが、どうするか。

(事務局)

計画の推進の部分については、何かあれば今後意見をもらいたい。